

平成26年度霞ヶ浦学第一講 要旨 (結果報告)

実施日時：平成26年6月29日(日) 13:30-15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター2F会議室

講師：沼澤篤(霞ヶ浦環境科学センター 環境活動推進課嘱託)

参加者数：27名

要旨：「霞ヶ浦学」は、湖沼学の霞ヶ浦版です。「霞ヶ浦学」は、自然科学、人文社会科学など多くの視点から、霞ヶ浦に関する諸現象や知識を総合的、体系的にまとめ、次世代に伝えていくための方策を研究する実践的な学問ですが、いまだ発展途上にあり、「霞ヶ浦学」確立には道半ばです。

「湖沼学」では、約150年前から湖沼を対象とする科学的な調査が始まり、フォーレル(スイス)やフォーブス(米国)など湖沼学の開祖とされる学者の先駆的な業績を経て、世界中で研究が進展しています。日本でも戦前の田中阿歌麿、吉村信吉らによる優れた業績の上に、戦後は各大学や研究所で陸水学の一環として、世界的な水準で湖沼研究が行われています。しかし、民俗学、歴史学、社会学、経済学等の成果を取り込むことは不十分です。近年では、富栄養化、化学物質汚染、生物多様性、水位変化など人間活動にともなう環境問題の一つとして、その改善のための知識体系として湖沼学が注目されています。

本講座の第一講では、小宇宙としての湖という視点から、霞ヶ浦の全体像を時系列的に俯瞰することから始め、「深い湖」とは異なる論理をもつ「広く浅い湖」であり、海跡湖、^{せきこ}潟湖としての性格が強い「霞ヶ浦」という湖沼の特異性を強調してみました。これまでの湖沼学では、「深い湖」の鉛直方向における水温や溶存酸素の変化、プランクトン分布などに着目し、湖水の構造のアカデミックな面白さに力点が置かれ、広く浅い湖の論理は、敬遠されてきたようです。

広く浅い湖は平野部に位置することが多く、流域の土地利用、産業、日常生活の影響を受けやすく、本来、広く浅い湖は沿岸帯が広く、湿地が発達し、水生植物など多様な生物が分布します。そのことが、熱力学的な理解によれば、物質循環と自然浄化が機能する場としての沿岸湿地帯の評価につながるのですが、従来の湖沼学では認識が弱いところです。

首都圏に位置し、都市部と農村部の両方に隣接する霞ヶ浦は、地域社会が「広く浅い湖」の論理、特に富栄養化しやすい湖であることを深く認識する以前に、開発、治水、利水の論理が優先されました。それによって、水害は皆無となり、農業生産は安定し、淡水資源としての湖水は、都市用水、工業用水、農業用水として効率的に利用され、茨城県の経済発展に貢献してきました。一方、築堤と沿岸湿地帯の干拓、埋め立てによって、物質循環と自然浄化の機能が弱体化し、産業排水、生活排水による流入負荷の増大と併せて、湖水の富栄養化が急速に進行し、地域社会は下水道整備をはじめとして、その対策に追われることになりました。結果論であっても、浅く広い湖の湿地の機能や湖岸形態の保全について理解を深める上で、霞ヶ浦は貴重な事例となっています。

